

令和3年度第2回屋久島世界遺産地域科学委員会 ヤクシカ・ワーキンググループ 及び特定鳥獣保護管理検討委員会合同会議について(報告)

1. 開催日時

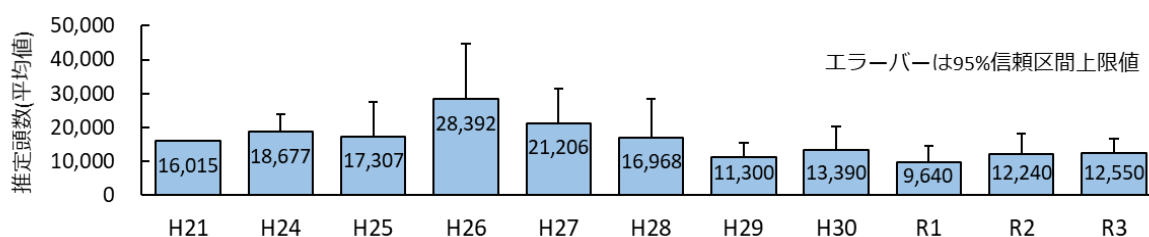
令和4年1月31日(月) 13:30～16:30 WEB 会議

2. 議題と議事概要

(1) ヤクシカの生息状況等について

■ 報告の要点

- ・昨年度と比較すると北部(河川界区分9)においては減少していたが、島南部から西部にかかる河川界区分5～7においては増加しており、島全体としては昨年度と同程度の個体数であった。



- ・電気柵の完成や指定管理鳥獣捕獲の影響で尾之間下や一湊林道で推定密度が減少に転じた。

■ 主な意見

- ・糞粒法・糞塊法については時期により糞の消失速度が変わるため、調査期間が長い時は、調査時期による差が出るので、その点も考慮されるとよい。
- ・状態空間モデルを使う場合、糞粒・糞塊両方のデータを使えるが、河川界の10区分に分けるとデータ数が足りないため、北東部、南西部くらいの大きな区分での分析となる。
- ・途中で個体数が高いまま推移していることについては、個体数を減少させるために必要な捕獲数が確保できていない可能性が考えられる。加えて、海から近いので糞粒を分解する昆虫が少なく、結果としてより高い密度が推定されていることも推測される。

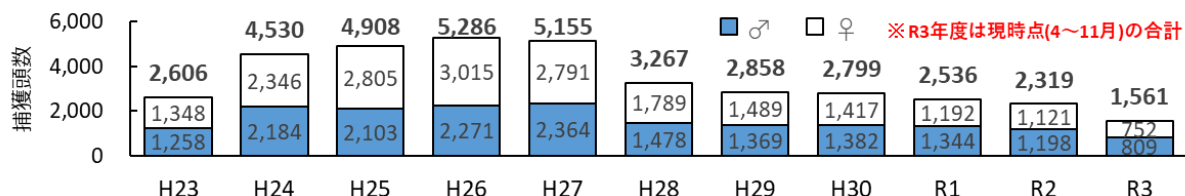
■ 了解事項、検討課題

- ・次回、情報提供において松田委員から状態空間モデルによる個体数推定結果を報告。

(2) 捕獲等の被害防止対策について

■ 報告の要点

- ・屋久島町猟友会員は70歳以上の割合が38%となり、年々、高齢化が進む。
- ・ヤクシカ捕獲頭数は微増し、R3年度(4～11月)は前年度同期の102%である。



- ・指定管理鳥獣捕獲等事業については、一湊林道地区においてくくり罠による捕獲を実施中であり、現時点(1月10日現在)の捕獲実績としては、目標30頭に対して22頭である。
- ・本年はシャープシューティング体制による捕獲を2回実施し、11頭(オス6頭、メス5頭)を捕獲した。捕獲車両を確認すると直ぐに逃走する個体や、草刈り未実施の範囲に隠れた個体がいた等の理由で、射撃率及び全滅率が低下した。

■主な意見

- ・河川界区分ごとの生息密度の変化はわかりやすく、今後これをもとに捕獲計画を立てるとよい。
- ・半減目標を各河川界の半減値にすると元々生息数が多い箇所では半減値でもまだ大きいことから、全体での半減値を各河川界の共通の目標値として示した方がよく、そうすることで重点的に取り組まなければならないエリアを把握しやすくなる。
- ・絶滅危惧種は宮之浦川流域より安房川流域の方が多い、その視点では河川界区分2が重要。
- ・年度によって推定密度が高ブレしているところもあるので、生息密度の変化を見る時は単年度との比較ではなく、これまでの傾向を連続的に見ていく必要がある。
- ・屋久島町でのヤクシカの利活用割合は傾向としては横ばい。食肉処理施設の処理能力についてはまだ余力はあるが、1日で多量に来ると処理できない。

(3) 森林生態系の管理目標及びその他植生モニタリング等

■報告の要点

- ・東部地域は5年前より種数が増加。標高600m以上は2000年代の種数を超え目標達成した。
- ・川原2地区のマテバシイで、カシノナガキクイムシの穿孔が過去最多の98個を記録した。
- ・希少種・固有種について、地生種は21地点中10地点で種数減少、6地点で個体数減少。ヤクシカによる採食や岩場や沢沿いに生育する個体の自然落下や水流の影響などが考えられる。

■主な意見

- ・柵外でシダの被度が増えたり、柵内で被度が減少している点も見られ、ヤクシカだけでなく他の生育植物種の競争による影響も考えられるため、他の植物種の被度や倒木等の情報もあるとよい。
- ・安房の保護柵周辺はヤクシカの密度が減ったことにより柵外でも植生回復してきていると考えられる。今後の変化を見ていきたい。

(4) 特定エリアの対策(西部地域)

■報告の要点

- ・囲い罫による西部地域の計画捕獲を実施中。1月時点での捕獲は全て雄(5頭)であった。
- ・モニタリングを開始し、まだ1年程度のため評価が難しい。今後もモニタリングを継続する。

■主な意見

- ・西部での保護柵について、林床植生が何もない状況からスタートしているため、柵内の種数は増えていく。西部の別の柵の例では、最初はゆっくりした変化で、途中から一気に種数が増加した。
- ・生息密度推定は、次回WGでの定点カメラによる結果を見て考察したい。

(5) 今後のヤクシカ管理方針等について

■報告の要点

- ・第二種特定鳥獣(ヤクシカ)管理計画については、令和4年4月1日からの5年間を計画期間とした次期計画を策定中である。生態系被害等の軽減に向けて引き続き捕獲を推進するが、捕獲の目標については各種モニタリングの結果等を考慮して順応的に見直すこととする。
- ・SS事業の5年間の総括として、安全性を維持したまま地元主体の体制構築、捕獲効率と費用対効果の向上を図れているが、関係機関への更なる周知と調整、技術向上や環境整備が課題である。
- ・今後はSSと他の捕獲方式とのゾーニング、中～高標高域への導入など、島全体の捕獲効率向上へむけ、戦略的な活用を検討していく必要がある。

■主な意見

- ・ 個体数を効果的に減少させるために雌の捕獲割合を高める技術の導入を検討することは重要である。一方で、捕獲戦略によっては雄を最初に捕獲し、雌を捕獲しやすくするという方法等もあるので、雄の捕獲が軽視させないように留意する必要がある。
- ・ 屋久島町では捕獲個体は極力施設搬入を推奨しており、補助金も施設搬入の方が高いが、林道から捕獲地点が離れているなど搬出が難しい場所では埋設。
- ・ 今後の SS について、規模、他の場所とのローテーション、予算措置等、検討頂きたい。
- ・ 従来 of 罾、罾、SS それぞれの費用対効果を試算し、次回報告してほしい。
- ・ 費用対効果もあるが、どの位捕獲目標が達成できるかを考え、状況に応じ、捕獲方法を検討することが重要。費用対効果でお金がかかるから悪いというわけではない。単純に1頭あたりのコストで議論せず、リスク管理等の視点も重要で、全体として目標達成するための方法を考えていくとよい。
- ・ 森林施業がシカを増やしているという指摘もあり、シャープシューティングと森林施業の連携は重要。
- ・ 有害駆除の時期とシャープシューティングの時期が重なることが多い。シカがシャープシューティングの餌に誘引され、普段出没する箇所から離れてしまい有害での捕獲効率の低下を招くため、捕獲時期も少し考えてほしい。

■了解事項、検討課題

- ・ シャープシューティングの今後の展開
- ・ ヤクシカ捕獲の実施時期。

(6)その他**■報告の要点**

- ・ 屋久島固有の新亜種の発表、国立公園のシカ管理、くくり罾による小林式誘引捕獲法の情報提供。
- ・ ヤクシカの糞の DNA 分析の結果、高木由来の資源に依存し、個体数を維持しているが、副食として常に小型の植物を食べている。

■主な意見

- ・ 誘引捕獲法について、屋久島の場合、サルとの混獲が心配。ヤクシカの誘引餌はサルが食べるものも多いため、十分検討頂きたい。
- ・ 過去、数万年など長い単位でも植生は人間の影響を何かしら受けていると言われる。ヤクシカの管理や植生回復には人間の関与も含めて考える必要がある。
- ・ ナチュラルレギュレーションが起こるかどうかは問題ではなく、自然植生への影響がどうかは問題。植生への影響は明らかなので植生回復のためにどうすればよいかを議論していく必要がある。
- ・ 西部については、別途しっかりと時間をとって議論を行った方がよい。